

**2173再構築4**

**ファンシター第01案**  
**エリー**

## 序文

---

わたしはハーミットと呼ばれています。日本語で言えば隠者です。タロットカードの隠者がランプの光で人々を導いたように、わたしもみなさんを正しい道に引き戻して差し上げたい。そう思って筆をとりました。

わたしが紹介したいのは、保護区と管理区と自由区が互いに関心を持って交流し、支え合っていた、2100年代の黄金時代に書かれた、エリーという女性が、アツシという男性歌手に宛てたファンレターです。

保護区の始まりは、過疎の村を活性化させる手段だったという説がありますが、はっきりしたことは分かっていません。手紙から分かることは、30人くらいの村が最小単位だったということです。

村人は、管理区の工場で13歳から15歳の子どもたちが生産した、制服や石鹼の使用者でした。好きなものを選ばず、与えられたものを使用することで、確実な需要を生み出す存在でした。

制服の基本カラーは白で、特別な地位にあるものだけが赤を着ることを許されていました。今とは違って、運動着と正装と下着類のみのシンプルな所有だったようです。

林業や農業など、基幹産業を持ち、村同士で物資を都合し合っていました。

自分たちが食べる分だけの野菜を育てたり、原生林を管理したり、12歳以下の子どもを育てたり、自立した老人の生活支援をしたり、「生物として必要なこと」を引き受けていました。一言で言えば、国の父母であり、聖なる存在でした。

「必要」を満たす保護区の人々に対して、「好き」を満たしていたのが自由区の人々でした。彼らは、それぞれ自分が考えたことを自分で実現し、人々に提供していました。起業精神に富んだ冒険心豊かな人々でした。

ネットを經由して世界に売り出せば、誰にでもチャンスのある夢のある時代でもありました。

女は男に頼らなくても、保護区に入れば子どもを独立させることができました。

男も妻子を養うという義務から解放されて、本当に好きなことに生涯を賭けるチャンスを手に入れました。

女であっても子どもを産まないという選択を堂々と出来た時代でもありましたが、多くの女性は子どもを産みました。6歳まで自分で育てて、7歳になると保護区にいる知り合いに預けるか、自分が保護区に入るか、選択が求められました。子ども時代に保護区で一緒に育って、保護区を選んだ友だちとつながりを保ち続けることで、この難問を解決していました。

2500年を迎える現代のように、節制を忘れた保護区が、自由区に依存して、贅沢な暮らしをしているわけではありません。自由区も現代のように、起業精神を忘れた、何もしない多くの人々が、成功者に群がって暮らしているわけではありません。

黄金時代を支えたものはなんだったのでしょうか？

今と何が違うのでしょうか？

わたしはその答えをエリーの手紙の中に探し求めていきたいと思います。

2500年12月吉日 ハーミット

手紙：2173年7月吉日

---

こんにちは、エリーと申します。

一度、会ったことがあるのですが、覚えているでしょうか？

父サクが経営する横浜駅からかなり離れた場所にある商店街の喫茶店で占いをしていたものです。

お手紙を差し上げたことには理由があるのですが、まずはわたしの生い立ちを聞いてください。

わたしの父方の先祖は、自由区で商売に成功して、商店街の一角にある喫茶店を手に入れたそうです。

親の跡を継いだ父は、コーヒーや紅茶や料理の勉強をするために、東京に修行に行き母エミリーと出会ったそうです。

ウェイトレスとして働いていた母は、父の店でも接客を担当することになりました。

そして、4歳上の兄ハルが生まれました。

兄は、7歳の時、父方の祖母が保護区で暮らしていたので、預けられました。

まだ3歳と小さかったわたしは、あまり兄のことを覚えていません。でも、一緒に駄菓子屋に買い物に行った時、じっとおもちゃの指輪を見ていたら、あとでおもちゃのハンドバックいっぱいに指輪をプレゼントしてくれたことがありました。

父とよく喧嘩していたので、子ども心に父も兄も怖かったけれど、今になって思えばわたしには優しくかったように思います。

わたしが7歳になった時、母はわたしと一緒に保護区に入ることを希望しました。父はすごく反対したそうですが、わたしのことを思って結局は折れたそうです。

わたしたちを受け入れてくれた村は、母が昔育ったところで、林業と原生林の管理が基幹産業です。ですから、すごく山深い場所にあります。夜には真っ暗になるので、とても怖かったことを覚えています。

印象に残っている人は、ボナ先生とスズさんです。

ボナ先生は、天文学の大学教授だったそうです。自由区で土星の研究をしていたそうです。しかし、実際に星を観測できる保護区の暮らしに憧れて、大学を辞めて子どもたちを教えることにしたそうです。

ボナ先生は天文学を専攻しているうちに、占星術やタロットや聖書に興味を持って独学で勉強されました。そして、幼いわたしに教えてくれたのです。

体力がなくて就職するのが難しかったわたしが、占い師としてお金をもらうことができたのも、すべてボナ先生のおかげです。

しかし、ボナ先生のようにパッと問題の核心を突くことができないわたしは、好きなだけ話してもらうことしかできなくて、商売としては全然成り立っていませんでした。

兄は、物流ドライバーとして保護区に泊まりながら配達をして自活していましたが、わたしは完全に父に頼った暮らしをしていました。自分でも情けないと思います。

そんなわたしの憧れだった女性がスズさんです。村の女性でただ一人、原生林の管理をする山男をしていました。全然タイプが違うのに、いつも気にかけてくれて、山の話聞かせてくれたのを覚えています。

母は給食係として忙しかったので、人見知りでなかなか子ども同士の輪の中に入れなかったわたしを二人とも気にかけてくれたのかもしれませんが。

疲れてよく寝ていたのを知っている周りの大人たちが心配して、13歳で入寮する時も、いろいろ頼んでくれたようです。最初の3ヶ月は誰でも立ちっぱなしのラインにつくのですが、それを免除してもらえました。寮でも、係の仕事を割り振られませんでしたから、休みの日は一日中寝ていても怒られませんでした。そうしなければ、頭痛と吐き気で起きていられなかったのです。

3年間、綱渡り状態だったけれど、「事務限定」で卒寮資格を得ることができました。

自由区でやっていく自信がなかったのも、母のいる保護区に戻りたかったわたしは、すごくほっとしたのを覚えています。

でも、卒寮式であなたの歌を聞いて、気持ちが変わってしまったのです。もう一度聞きたいと思いました。

わたしのために保護区で生きることを選んで、わたしの帰りを一人で待っている母のことを思うとすごく胸が痛みましたが、卒寮式で急遽自由区行きを宣言してしまいました。

もう一度歌が聞きたいことを正直に話したら、母は許してくれました。そして、父のところで暮らすように言いました。

それからは、あなたの活躍を楽しみに、自由区でひっそり暮らしていました。何のとりえもないわたしは、男の人とお付き合いすることもなく、友だちができるわけでもなく、なんとなく時間だけが過ぎて行きました。それでもよかったです。趣味で小説を書いたり、占いの勉強をしたり、好きなことができていましたから。

でも、自活できないわたしがいつまでも自由区にいては、父が自分のために老後の準備をすることができません。就職することも、占い師として稼ぐこともできない以上、わたしは保護区で待つ母のところに帰るべきなのです。

いつか決断しなければと思いつつ、あなたを見たい気持ちを捨てられなくて、先延ばしにしてきました。

自活さえできれば自由区で生きられるのだからと、就職活動をしたこともあるんです。座ってできる仕事なら大丈夫かもしれないと思って。

事務限定だと「健康な人を探しているから」と何度も断られることが多かったけれど、一度だけ研修まで進んだことがありました。会社や仕事についての説明を受けて、明日から本格的に結婚式の編集の仕方を教えてもらえることになって、すごくワクワクしていました。でも、家に帰る間、ずっと気持ち悪くて、お腹が減ったせいだろうと食べたら、すごい勢いで全部吐いてしまいました。父や兄に説得されて、泣く泣く断りの電話を入れました。

そのことがきっかけになって、わたしはやっと保護区に戻る決心がつきました。あなたとで会ったのは、もうあと数日で保護区に戻ると決まっていた時だったのです。

2173年3月7日の朝、わたしは「今日はアツシさまの34歳の誕生日。ずっとアツシさまのことを思って過ごそう」と心に誓いました。素敵な恋人とお祝いするあなたを思い浮かべて楽しんでいました。

それなのに、あなたは突然目の前に現れました。信じられませんでした。こんな奇跡があっというものかと思いました。しかも恋人と別れて傷心のあなたは、自分の恋愛運を占うために、わたしのタロット占いを必要としてくれたのです。占い師になって本当によかったと思いました。

大切な思い出にしたかったから、「お金はいらぬです」と言ったのです。でもあなたは、「俺の気持ちが悪くない。何か願い事はない？」とわたしの希望を聞いてくれました。わたしは、少しでも長く一緒にいたいと思って、「今日一日付き合ってください」とお願いしました。そんなこと、絶対断られると思っていました。それなのに「どこに行きたい？」と聞かれて、何が何だか分からないままにあなたについて行ってしまいました。

せっかく一緒にいるのに、緊張してなんにも話せなくて、ただそばにいることが嬉しくて、あなたの背中を見ながら、後ろを歩いていました。

着いた場所が重々しい雰囲気のホテルで、場違いな自分がすごく恥ずかしかったです。でも、食事まで一緒にできるなんて、これで思い残すことはなにもないと思いました。

部屋に案内された時は、これは絶対現実じゃないと思いました。でも、風呂場で身支度を整えている間に実感が湧いてきて、永遠に風呂場にいるわけにもいかないし、思い切って出て行きました。

すごく痛かったけど、あなたが優しく気遣ってくれたから頑張れたのだと思います。わたしにとっては人生で最大の難事業でした。

外泊したのは初めてでしたが、父は何も聞きませんでした。わたしも何も言いませんでした。そして、予定通り母の待つ保護区に入りました。

区長の補佐として、みんなの意見を集めるのが最初の仕事でした。ボナ先生が付き添ってくれたので、みんなわたしではなく、ボナ先生に相談しました。どうしていいのか分からなかったもので、とても助かりました。わたしがしたことといえば、会話を録音して、後でリーダーでテキストに起こして、間違っていないか確認することだけでした。最初からいろいろ任せてはかわいそうだと思ってくれたようです。

仕事は楽しかったのですが、うつ伏せになると何故か気持ち悪かったり、体が重かったりして休みがちでした。

よくあることだから、わたしは気にしてなかったのですが、心配した母のすすめで女医のユイ先生に診てもらいました。

わたしは自活しなければという長い間のプレッシャーで、生理が止まっていたので、特に気にしてなかったのですが、経験があるなら調べた方がいいだろうと言われて妊娠検査をしてもらいました。結果は陽性でした。

生理がとまってしまっただけで産めなくなる不安に苛まれていたので、いきなりの妊娠は信じられませんでした。でも、産めると分かった。これはチャンス。だから産んで育てよう。そう思いました。でもそれをあなたに知らせるべきなのか、すごく悩みました。

わたしは母の力を借りて、保護区で産んで育てるつもりなので、あなたに何かしてほしいわけではありません。でも、わたしが子どもを産むことを認めて欲しい気持ちがあります。否定しないでほしい。それを伝えたくて、筆をとりました。

結婚してほしいわけでも、父親になってほしいわけでもない。そんなことはできないし、したいとも思わない。ただあなたを見守り続けることができればそれでいいんです。

最後まで聞いてくれてありがとう。

これからもファンとして応援させてください。

2173年7月吉日 エリー

今でも保護区に入れるのは40歳までという決まりがありますが、特例が通例になって出入り自由に変わってしまっています。

しかし、2100年代には、40歳までに自分の未来を決断することが求められました。

自由区は、自己責任の世界なので、老後に対する保障がなにもありません。将来のために自ら資金を用意できなければ、歩き遍路として町をさまよう未来が待っています。

だから、多くの方は、十分な資金を蓄えることができないと判断した場合、保護区で必要を満たすことを選びます。

40歳になっても成功できなければ、挑戦をあきらめて、保護区を支える側になる方が賢明です。

しかし、制約の多い保護区の暮らしを嫌い、困ると分かっている自由区に残る人もいます。そんな人たちは、一か所に定住すれば追い払われるので、施しを受けながら歩き回る暮らしを強いられます。動けなくなったら、人気のない場所で死ぬまでじっと耐えるしかありません。運悪く死体が発見されれば、ゴミ置き場に捨てられる運命です。

死と隣り合わせの厳しい現実が、自由区には待っています。

それでも、成功を夢見て、勝負に出る若者が後を絶ちません。特に芸能関係は人気でした。エリーが憧れていたアツシもその一人です。

資料によると、アツシが3歳の時、4歳上の兄のために、父と母と4人で自由区から保護区に入ったようです。しかし、自由区にいたころから、アツシの父は無気力で、アツシの母に暴力をふるっていました。

今でもそうですが、自由区で成功した経験を生かして、保護区の運営者になりたくて戻った人は、積極的になんでも参加します。しかし、自由区で失敗して、仕方なく保護区を選んだ人の中には、気持ちの切り替えができずに無気力になることがあります。仕事を休みがちになります。

よくあることなので、そんな時は、生きがいを見つけて元気を取り戻すまで気長に待つ場合が多いようです。アツシの父の場合もそうでした。

しかし、暴力をふるった場合には厳格な処罰が待っています。具体的には、保護区を追放されて、自由区に放り込まれます。

保護区の住まいは、大人一人に対して一軒が与えられます。外とつながる出入り口には、給食室や、食堂兼会議室や、医務室や、図書室や、大浴場などの設備を備えた「センター」と呼ばれる大きな建物が建っています。そこから放射線状に木造平屋建ての一軒家が並んでいます。

センターに近い場所は足の弱った高齢者、次に子どもの世話をしている大人、一番外側に一人住まいの16歳以上の大人が入ります。

半分私物化してしまっている現代とは違い、あくまで「借りもの」であり、いつでも引っ越しを命令できました。だから、次の人に迷惑がかからないように、綺麗に使うことが求められました。

家族で保護区に入っても、基本的に、大人一人と子ども一人の組み合わせにわかれて暮らすことが求められます。

アツシは母と、兄は父と暮らすことになります。

仕事を休みがちだったアツシの父は、家事もさぼることが多く、兄が引き受けていたようです。

今も昔も、主従関係を作らないために、健康上の理由がないのに大人が大人の世話をすることは認められていません。しかし、兄を心配したアツシの母は、村の人に隠れて父と兄の家の世話をしていたようです。アツシの兄が13歳になり入寮した後は、誰もが気づく状態になっていましたが、黙認されていたようです。

アツシの兄は、家族のことを心配して、卒寮後に真っ直ぐ保護区に戻っています。

しかし、家族を思う気持ちが、必ずしもよい方向に働きませんでした。親から独立したことで、対等という意識が芽生えたのか、兄が父の態度を非難するようになり、争いが表面化したからです。

兄が16歳になる年、アツシは12歳になっていました。ネットのインタビューでそのころのことを話しています。「父のことはずっとどうしていいのか分からなくて、兄や母の陰に隠れていることしかできない自分を責めていました」という記述が残されています。

どうにもならないことをどうにかしようとして、家族全員が苦しんでいました。

その苦しみは、父が兄に椅子を振り上げた時、母が身代りになってケガをしたことで終わります。アツシの父の追放が決まったからです。

しかし、保護区を出ていく日の朝、アツシと兄を連れた母が、父を訪ねるとそこには誰もいませんでした。

村中総出で捜索が行われました。そして、山の中で首をつって死んでいる父が発見されました。

父の死は、アツシに強烈な印象を残しました。歌の原動力になりました。

父の自殺という出来事を乗り越え、13歳になったアツシは管理区の工場仲間と出会いました。自由区にひかれましたが、兄と母のことを思い、保護区に戻っています。

しかし、どうしても夢を捨てきれなかったアツシは、父同様に無気力になって、仕事を休むようになります。心配した母のすすめで、自由区行きを決意したそうです。兄は最後まで反対していましたが、自由区に出ても交流を持ち続けようです。

15歳のエリーが見たのは、自由区で成功して、子どもたちの人気を得て、卒寮式に呼ばれて歌う、23歳のアツシの姿でした。

保護区の子ども用端末は、アクセス制限がかかっています。解除されるのは、卒寮したときです。

知識さえあれば解除することも可能ですが、エリーは解除していません。

多感な時期を自然の中でゆったり過ごしたエリーにとって、人間の根源に迫る、ドロドロした感情を扱うアツシの歌は、よほど強烈な印象を残したのでしょう。

卒寮式では、自分の考えで、保護区に行くのか、自由区に行くのか、宣言することができます

。その宣言は、誰にもくつがえすことができません。

だからこそ、保護区や、管理区や、自由区の代表が自分たちの魅力をアピールして、少しでも宣言するものを増やそうと競い合います。

そういう意味では、保護区で生きるしかないと思い込んでいたエリーの心を一瞬で変えたアツシの歌は、立派に役割を果たしたと言えるでしょう。

## 母と娘の感想と今後の予定

---

はじめに断言しておくけれど、わたしは「好きな歌手に出会って、子どもが産みたい」と思っているわけではありません。

最初は「自由区で働く夫が、保護区に入った妻子を支援する」という設定にしようと思った。でも、それだとメールとかで簡単な会話をする程度で、手紙のようなまとまった形で届けることはない。だから「憧れの歌手に出会って一夜を共にする」という「大きな嘘」を入れることにしました。

すごい恥ずかしい設定だけど、「子育て」と「手紙を書き続ける」という部分を支えるためには欠かせない要素だから入れました。

その嘘にリアリティを持たせるために、実際に体験したことをおりませています。

-

まず最初に書いたのは「手紙」部分です。

母から、「保護区が分からなくて気になる」と言われてしまいました。

娘から、「更に未来に人を設定して、過去を振り返る形にする」というアイデアをもらって、「序文」と「解説」部分を入れて書き直しました。

その感想を元に、可能な修正を加えたものが、今回登録した「2173再構築4:ファンレター第01案」です。

-

ここから、どう変えていくのか？

第01案だと「ハーミット」はタロットカードの隠者に出てくるような「おじいさん」で、「結論を出した立場」から語っています。

ハーミットを「若い女性にして、エリーと同じように悩んでいる立場から書いた方が、読者と同じ目線に立てて共感してもらえるのではないか？」というのが、娘のアドバイスでした。そういうのを想定して言ったのに、全然違う結果になってかえってきたと言われました。

最初の保護区と管理区と自由区の説明も足りないと言われました。

そこら辺を直すためには、もっと設定を詰めたり、いろいろなことを勉強しないと無理です。

いつになるか分からないので、第01案も登録することにしました。